編　集　後　記

大学院に進学するため，生まれ育った東京から札幌へ移った年の冬は，ひと冬の積算降雪深が観測史上最大を記録したほどの多雪でありました．初めての雪国の冬であるところにいきなり記録的な多雪ですから，もう何もかもが印象的で，今でもその冬のことだけはあれこれ憶えています．そしてもうひとつ，「北海道の（あるいは雪国の）気候というものが少し分かってきたかな」と初めて思った日のこともよく憶えていますが，面白いことにそれは記録的な冬の最中でも直後でもありませんでした．その翌年の晩秋，「早いとこ旅行にでも行かないと“あの冬”がじきに来てしまうぞ」と焦りを感じている自分に気付いたときに，なるほど北海道の気候というものが「身に付いてきた」らしいと感じたものです．それ以来，「ある土地をよく知るには2年かかる」と考えるようになりました．

同じようなことで，「留学などの海外生活を1年くらいで終えて帰国した人と，2年以上滞在した人とではその国に対する印象がだいぶ違う」という話を読んだことがあります．住み始めてしばらくは総てが夢のようですが，1年経つころになるとその国の嫌な面が急に目につき始め，ここで帰国してしまうと悪い印象ばかり残ってしまう．2年経つころになってやっとニュートラルにその国を見られるようになり，印象はまた変わってくるものだということでした．

これを「ある地域を理解するためには2年以上滞在する必要がある」と言い直してしまいますと，それでは海外調査などとてもやっていられない気がして，思わず前言を翻したくなります．しかし考えてみれば，長く住んでいる地域の気象データなどを見るとき，そこに数値以上の実感を伴ったイメージを感じ得たというような経験をお持ちの方は少なくないはずです．やはり時が教えてくれるものは確かにあり，そしてそれは単なる「情報」よりもずっと豊かな，「身に付いた知」なのだと言えるようです．

そういうわけで，ある土地に長く滞在して身に付いた見聞というものは，インターネットで検索した情報をいくら積み上げても得られないような何ものかを，必ずや含んでいるのではないかと思います．海外での滞在生活を経ていろいろな見聞をお持ちの方がいらっしゃいましたら，ぜひその一端を「滞在記」として会員の皆様に御紹介いただきたくお願い致します．いろいろ申しましたが，もちろん「2年以上」などという条件はございません．多くの御寄稿をお待ちしております．

本号が皆様のお手元に届くころ，私は新潟での初めての冬を大いに堪能しているはずです．新潟の雪は私に何を教えてくれるのか，その後どのような「知」が身に付いていくことになるのか，今から楽しみでなりません．

（松元高峰）